

- 立科小学校/午前9時～午前11時30分
電話 56-3131 (呼)・有線2190 (呼)
- 立科中学校/午後2時～午後5時
電話 56-1076 (呼)・有線2251 (呼)
- 立科町児童館/
午前 11時40分～午後1時30分
電話 56-0303 (直通)
有線 8889 (直通)

※予約をされる方は児童館または小・中学校の
教頭先生へご連絡をお願いします。

6月、 五無齋・保科百助先生を偲ぶ^{しの} ～奇行奇言の背後に横たわる実像～

立科町教育相談員 岩上起美男

6月は、立科町が輩出した偉大な教育者、五無齋・保科百助先生が誕生し、そして、逝去した月です。

五無齋先生は、明治元年6月8日、山部に生まれ、極めて多角的な才能と個性を遺憾なく発揮して、明治44年6月7日、44年の生涯を颯爽と駆け抜けました。6月、出生日の前日に多くの人に惜しまれつつ、永眠したのです。

作家、井出孫六氏（旧南佐久郡臼田町出身）は、「五無齋・保科百助は、とくにその奇行によって語られることが多いが、それらの奇行の背後に横たわる実像」と「長野県が『教育県』とよばれてきた歴史の実像」にふれたいという二つの関心が交錯して、「保科五無齋 石の狩人」（リブポート）を著したそうです。このような五無齋先生の奇行奇言と実像とのギャップについては、先生を知るほとんどの方が指摘しています。

俺は奇人だぞ、変人だぞ、と叫びながら、他人も及ばぬほど清く、正しく、普通の人間道を歩いていた……。細心で、几帳面で、義理堅くて、人間味が豊かで、常識のよく発達した高潔な人物でありながら、日常の行為に現れるところは、奔放、無作法、奇言、奇行、罵倒、皮肉。日常の常軌を逸したような生活は、自分の真実の相を自分から歪め

て見せる自己苛責の筈であった……。

五無齋はよいが、その奇行は感心しないという人がいる。しかし、五無齋から奇行を取ったら五無齋はない。奇行が五無齋であって、奇行と五無齋は二にして一、一にして二というものである。五無齋の奇行のなかに、その人間味、その偉大さが満ちあふれているところを私は好んでいる……。

事ほど左様に、五無齋先生の奇行奇言には枚挙にいとまがないのです。

諏訪の地に病める島木赤彦を見舞った、アララギ派歌人で、小説「野菊の墓」の作者、伊藤左千夫翁を相手取って、「お前に万葉（集）のよさがわかるか。」と啖呵を切った。翁は、それに答えず、宿の庭木を見るばかりであった、と。

明治38年（明治40年という説も……）、読売新聞の連載記事「奇人百種」の最終回に、第一等入選作品として、「保科五無齋」が掲載された。その内容は、「逆一先生」というあだ名が師範学校卒業時の席次（末席）に由来すること、教育会に臨席して演説を申し込むが、「糞の成分を論ず」「教育会長の無能を歎ず」という演題であったため、幹事から拒否され、他人の演説にドラ声をあげて妨害を試みたことなどのエピソードの紹介と鈿物採集の業績、私塾の開設、そして、子

弟の薫陶の様子などである。

だが、五無齋先生をよく知る人は、「その選に入りたる人の書きたる奇行は、小生等の知りたる五無齋の奇行の半にも及ばざる。」と言つう。

日露戦争直後の明治39年5月15日、長野市妻科で保科塾を開いていた五無齋先生が、衣紋正しく城山館に赴いた。当時の日本は、大國ロシアを破り、戦勝気分が沸き返っており、その日、日本海軍戦の立役者であった伊東祐亨元帥（海軍軍令部長）、東郷平八郎海軍大将（連合艦隊司令長官）、上村彦之丞海軍中将（第二艦隊司令長官）の善光寺霊殿参拝に、長野市内の沿道は北信各地から集まった群衆で埋まった。長野市は、城山館で三將軍の歓迎の宴を開いた。その会場に五無齋先生が押しかけたのだ。

とんでもない演説をして、市が主催した歓迎会で失礼があつてはならぬと受付で入場を断られたが、先生はテコでも動かない。困り果てた受付の役員は、絶対に演説はしないという条件付きで入場させた。会場では屈強の若者2人（市長と警察部長という説も……）が、先生の両側近くで演説阻止の任に当たった。だが、將軍側の謝辞が終わるや、先生は警戒の2人を振り払って立ち上がり、声高らかに、「三將軍に歓迎の辞を申し述べる。」と前置きして、次の四首を朗詠した。